

費用がかかっているのだろう。

一九八七、八八年度の支出総額はウィーン国立歌劇場の場合、ざっと九十億円である。(フォルクスオペーは約四十億円) それに対しての収入総額はプログラム代、放送権利金、舞踏会収入、海外公演の収入なども含めて約三十億円(同六億円)となっている。公演回数をシーズン中約三百回とすると、国立歌劇場では一晚の公演ごとに平均二千万円、フォルクスオペーでは一千万円強の赤字が出る計算になる。

蛇足としてつけ加えておくと、オペルンバル(舞踏会)の収入はたった一晚で二億五千万円である。もともと二万本の花を使用しての飾りつけをはじめとして、準備にかかる諸経費も相当なものだろうが。

蛇足ついでもうひとつ。公演中の国立歌劇場ステージのビデオ撮影は一分間千ドル(一九八九年現在)、というのが最低料金である。それも劇場専属のアーティストのみが出演している場面に限り、それ以外のゲストが画面に入ると、その人のギャラがこれに加算される。特別許可をとってバックステージなどを撮影するには一回約六万円(同前)の基本料金がかかる。

オーケストラ、コーラス、バレエ団を丸抱えにし、多数の劇場専属のソリストの給料、そして外部から招聘するゲスト歌手のギャラなどもさることながら、総額で平均三千万円かかる国立歌劇場での一晚の公演にたずさわる裏方さんの数も、二百六十一人という大所帯である。「最近はおペラの切符も高くなった…」などと嘆くのはオーストリアの納税義務者に対して失礼かも？

うらめしや

次から次へと押し寄せる日本からの旅行者のみならず、多くの音楽ファンにとっても一回は訪れてみる価

値のある中央墓地。墓地とはいえ、もはや半分観光地のようなものである。特に時間に制限のある日本からのバック旅行者など、空港よりバスにてまず中央墓地を訪問し、その足で市内観光をしながら最終的にはホイルゲに駆け込む、といった事になる。これは良識ある市民の目に「日本人は墓参りがすんだと思ったら酒を飲んで騒ぎまくる、節度に乏しい民族なのか」とうつる事もあるらしい。

それはそれとして一八七四年十一月一日、ウィーン市が計画し、管理も行っているこの広大な（総面積は二平方キロメートル以上である）墓地がオープンに至るまでには、さまざまな紆余曲折があった。

オーストリアではキリスト教が日常生活に深いつながりを持っているが、キリスト教と一口にいっても、その宗派は多い。一般的なのはカトリックだろう。しかしそれ以外にもプロテスタント、ギリシャ正教、ユダヤ教、など派閥は多く、それぞれに専有の教会と墓地があり、信者達は普段からそこに集まり、埋葬されてきた。中でもユダヤ教徒は長い歴史の中、何回もユダヤ人追放の災禍に遭遇し、教会や墓地ばかりでなくトイレも学校もユダヤ人専用、という扱いに好むと好まざるとにかかわらず甘んじてきたのである。

そこに突然「市営の中央墓地では死者の宗派は問わず」という方針が市議会で決定された。ある程度の区分けは行うにせよ、ユダヤ教徒をも含めて万人を同一の墓地に埋葬する事は一大事であった。これに対してカトリック派は「我々を泥棒や人殺し、そして自殺者などと一緒に埋葬するとは何事か！」と、激しい反発をした。

実際にユダヤ教徒が中央墓地内のイスラエル区に埋葬されるようになったのは、それまでヴェーリングガーにあったユダヤ人専用墓地が閉鎖された一八七六年からである。当時のイスラエル区は中央墓地入口のうち、最も街の中心に近い第一門から入ったところであった。しかしここに埋葬された人々の親類縁者は、その後の歴史の中でことごとく地上から抹殺されてしまい、古い墓標はそこに手を入れる人もいないまま荒れ放題になっている。

市内各所に点在していた墓地が次々に中央墓地に移転され、墓地跡は市民の公園として装いを新たにす。一九〇五年には正門（第二門）が完成し、五年後には正門の正面奥にあるマックス・ヘーゲレの設計によるドクター・カール・ルエガー記念教会も完成した。ルエガーは一八九七年から一九一〇年に亡くなるまでウィーン市長を勤めた政治家である。この教会はオットー・ヴァーグナーの設計によるシュタインホーフの教会（十四区にある）と同じユーゲントシュティルの建物である。

墓地そのものも拡張されつづけたが、それに加えて一九二二年十二月二十二日には市営火葬場が稼働しはじめた。

ジンメリンガー・ハウプトシュトラッセを挟んで中央墓地の向かいにある火葬場は、当初ウィーンっ子には馴染みの薄いものだった。葬式に限らず何事でも飾り立てたものが大好きだった人々にとって、死者を燃やして灰にしてしまう、という行為は「時代の流れ」ともいうべき厳しい現実であった。労働者葬儀協会の「我々はプロレタリアとして生き、プロレタリアとして死に、文明発展の定めに従って灰と化するのだ」という、多少自虐的な意味合いを込めたスローガンからもうかがえるように、火葬はウィーン一般市民の肌合うものではなさそうだ。

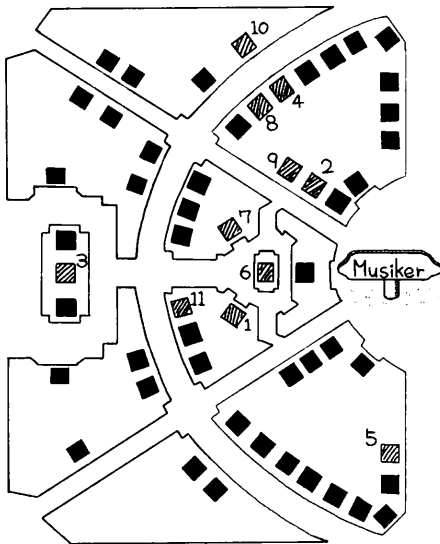
ここに埋葬される当てもない我々日本人にとって最大の興味は、有名人の墓を集めた特別区であろう。これは正門から入った前方にあり、地図上では三十二区ABC、及びその反対側の十四区ABCという番地になっている。いわゆる「楽聖特別区」は左側三十二区Aの部分。「Musiker」との表札が道に立っているのわかりやすい。音楽家を含めた有名人の墓はここばかりではなく、この近辺、また正門を入れて左側にまわり込んだところにあるジンメリンガー・ハウプトシュトラッセ沿いの塀際にも集められている。

詳しくは門衛のところまで三十シリングで買える地図に記載されているが、ざっと著名な音楽家の名前を列挙してみよう。

〔32A区〕 まず中央にあるのがモーツァルト記念像。モーツァルトの遺骸はザンクト・マルクスにある共同墓地に、他の多くの一般市民と一緒に埋められていた。墓穴の位置さえも不明瞭であった上に時間もたっていたため、中央墓地にその墓を移転する際に掘り起こしてはみたものの、どれが誰の骨か正確には判定できず、中央墓地の像はこのような名前になっている。したがってここに本物の遺骨は埋葬されていない。

余談になるが、ザンクト・マルクスの墓を掘った際に出てきた「これがモーツァルトのものらしい」という頭蓋骨は、一九〇二年以来ザルツブルクのモーツァルト財団に保管されていたが、これが本物である、との判断が一九八九年になって下された。モーツァルトのポートレートからも観察される前頭骨の発育異常、また頭蓋骨から推定される年齢と、当時の資料と照合した歯の状態などがモーツァルトのものとは一致する、というのがその理由である。ちよっ

32A区『楽聖特別区』の墓



- 1 L・ファン・ベートーヴェン
- 2 ヨハネス・ブラームス
- 3 C・W・フォン・グルック
- 4 ヨーゼフ・ランナー
- 5 カール・ミレッカー
- 6 モーツァルト記念像
- 7 フランツ・シューベルト
- 8 ヨハン・シュトラウス (父)
- 9 ヨハン・シュトラウス (息子)
- 10 ヨーゼフ・シュトラウス
- 11 フーゴー・ヴォルフ

と眉つばもののような気はするが…。

モーツァルト記念像の周囲で目立つのは、ベートーヴェンとシューベルトの墓である。このふたつは「尊敬するベートーヴェンの横に埋葬してほしい」というシューベルトの遺言に従って、当初ヴェーリンガー墓地に並んで埋葬されていた。双方とも一八六三年に一度掘り起こされ、遺骨が木製から金属製の棺に入れ替えられた。そしてその後一八八八年に改めて中央墓地に埋葬しなおされたのである。

これらより右手にはヨハン・シュトラウス（息子）とヨハネス・ブラームス、左手にはシュトライヒャー一家とフランツ・フォン・スッペの墓がある。シュトライヒャーはベーゼンドルファー以前の秀逸したピアノ製作者、スッペはオペレッタ作曲家。スッペの作曲したオペレッタの序曲は今日でも演奏されている。この区にはその他にカール・ミレッカー（オペレッタ作曲家）、ヨハン・ネストロイ（劇作家）、フリーゴ・ヴォルフ（作曲家、歌曲が有名）、クリストフ・ヴィリバルト・フォン・グルック（作曲家、そのオペラは今日でも時たま演奏される）、エドゥアルド・シュトラウス（作曲家、シュトラウス三兄弟の末っ子）、ヨーゼフ・シュトラウス（作曲家、同三兄弟のまんなか）、ヨハン・シュトラウス（父）、ヨーゼフ・ランナー（多くのワルツの作曲家）などの墓がある。

32 A 区の奥隣、〈32 C 区〉にも音楽家の墓は多い。カール・ミヒャエル・ツイーラー（オペレッタやワルツの作曲家）、ロベルト・シュトルツ（オペレッタや映画音楽の作曲家）、アーノルド・シェーンベルク（新ウィーン楽派の代表的作曲家、十二音技法の創始者）、エゴン・ヴェレス（作曲家、シェーンベルクの弟子）、ハンス・スワロフスキー（指揮者、多くの日本人指揮者育ての親）、ロッセ・レーマン（オペラ歌手）などと並んで俳優の墓もある。

正門の左側、空港よりの塀際（0区）にも百を越える、多かれ少なかれ世に名をなした人々の墓標が集められている。門に近い方から順に音楽関係者をひろってみると、ヨーゼフ・マイセーダー（ヴァイオリニスト、作曲家）、カール・チエルニー（多くのピアノ教則本の作曲者、ベートーヴェンの弟子）、アントニオ・サリエリ（作曲家、モーツァルト時代の大御所）、ヨーゼフ・バイヤー（日本で使用される初心者用ピアノ教則本「バイエル」の作者）、テオドール・レシュエイツキー（ピアニスト、フランツ・リストと並ぶ現代ピアノ奏法の教祖）などの名前がみられる。

これらの地区以外にも音楽家の墓を見つける事ができるが、ぶらぶらと散歩しながらさまざまな墓標を比較観察してみるのもおもしろいだろう。墓石の下にはどんな骸骨がどのような格好で横たわっているのだろう…、などと想像してみるのも一興か。

ドプリンガー

ウィーン一区の繁華街、グラーパーベンからちょっと横に入ったドロテアガッセという小路に「ドプリンガー」という名前の楽譜屋がある。ウィーンにいる音楽関係者でこの店を知らない人間はもぐりである、といえる程有名な専門店だ。

その名はウィーンに限らず世界的にも知れ渡っているが、もともとは「アイスグリュエプル」という貸し楽譜屋だった。一八一六年に創立されたが、これをルードヴィヒ・ドプリンガーが買取り、新規開店したのが一八五七年の事であった。さらに一八七六年ヘルツマンスキーという有能な経営者が買取り、現在の形態である同族会社の基礎ができたのだが、それ以来、現在のヘルムート・パニー氏（ヘルツマンスキーの曾孫）